
クラスに異種族が普通にいたらどうなるかに関しての一考察

ペタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラスに異種族が普通にいたらどうなるかに関しての一考察

【Nコード】

N1482BA

【作者名】

ペタ

【あらすじ】

学園ものとファンタジーの2つの王道ジャンルを少しミックスしてみました。

配合比率は学園8、ファンタジー2という感じです。

主人公の相馬は放課後に突然告白される。それは少し特殊な学校の少し特殊な女の子からのものだった。話は少し遡る・・・。

その1

0

「私と付き合ってくれ！」

大きな声だった。それは教室の空気が止まるほどに。

六時間目の授業が終わり、短いホームルームを終え、皆が、さあ、これから帰宅だ、部活だ、買い物だ、町の徘徊だ、という時だった。ホームルームを終え教室から出て行こうとした担任も、教卓から五歩、あと二歩で出入り口の戸に手が届くというところまできて、右足が前に左足が後ろに、右手を戸に向かって伸ばしていたその姿勢のまま固まっていた。

声を上げた少女は、今まさに俺の前に立っている。かなり小柄なその背丈は俺の胸ほどしかなく、大きな目と強い輝きを放つ瞳が俺を見つめている。

教室にあるすべての意識が、俺と少女の成り行きの見守りモードに入ったようだ。ざわざわしていた教室が静まり返っている。この都会にこんな静かな所があったとは知らなかった。学校が終わり速攻で教室から飛び出そうとしていた奴らも、とつとと帰ればいいのに、わざわざ歩みを止め、振り返り、教室で今まさに起こっている事象に注目している。

全生徒四三名、プラス担任一名、マイナス当事者の俺と少女の計四二名、かける二の瞳が、教室の窓側の一番後ろの俺の席、ただその一点をのみ見つめていた。

なぜ、こういう事態になったのかは分からない。だが、振り返っ

て考えてみると兆らしいものはあった。話は二時間ほど遡る・・・。

1

「相馬くん。お食事中にごめんなさい。今度の体育祭のことで、ちよつと、いいかな」

俺はがつついていた弁当箱から、視線を上に移した。そこにはクラスの子、早乙女奈緒が、少し緊張した面持ちで、目線を少し下に落としながら、それでも、がんばって話かけましたといった感じで、そこに立っていた。

「別にかまわないが、なに？」

早乙女は少しほっとしたような表情を浮かべた。

「ごめんね。やっぱり食事中は迷惑よね。あとでもいいんだけど・・・」

早乙女は少し作り笑いを浮かべながら、相変わらずおどおどした様子だった。

早乙女は女子としてはやや背が高く、髪は背中まである長い黒髪を後ろで結んでいた。色白で眼鏡をかけていて、成績もいい。それでいて学級委員長もやっている。いや、これは正確には押しつけられたといってもいいかもしれない。優等生という言葉を書き辞書で引いたら、例示として示されそうな女子である。頼まれると断れない性格のようで、学級委員長に加え、生徒会、そして体育祭実行委員長でも押しつけられていた。ちなみに学級の副委員長は委員長の指名で決まる。早乙女が指名したのは俺だった。数少ない同じ中学校出身の知り合いだからという理由で。だから俺はこのクラスの学級副

委員長という立場のようである。しかし、そのどうでもいい役職にふさわしく、特に何かしたという記憶もない。

「だから、別に構わないと言っている。要件は？」

俺の言葉に早乙女の作り笑いは消えた。そしてこのまま話を続けるか迷っている様子だったが、意を決したように話を始めた。

「実は、昨日、体育祭の実行委員会があっただけで、今年も異種混合のリレー大会が行われることになったの。それで・・・、クラス他の実行委員がぜひ、私たちの代表として相馬くんに出てもらいたいということになって・・・。その・・・、うちのクラスじゃ相馬くんくらいしか他のチームと対抗できる人がいないというか・・・。私は相馬くんは他にもいろいろ忙しいし、むりだよっていったんだけど、他の人がどうしてもって・・・。」

相変わらずのもじもじぶりである。早乙女はいつもの緊張した時の癖で、制服の端をつかんでいる。俺は少しいらついてきた。

「だったら、その他の人っていう奴らが頼みに来ればいいじゃないか。なんでお前が来るんだ」

俺の言葉に早乙女が泣きそうな顔になった。

「ごめんなさい。相馬くんと話をしたことがあるのって、クラスの体育祭実行委員の中には私しかいなくて、それでどうしてもってみんなが・・・。」

俺はクラスの中で、いい言い方をすれば周りから一目置かれてい
る存在、悪い言い方をすれば浮いている、そんな存在だった。男子
生徒も俺に話しかけるときはなぜかおどおどしている奴が多い。

「分かった。別にリレーくらい出てやる。それでいいんだな」

早乙女の顔が笑顔に変わった。

「本当に、いいの？ 迷惑じゃない？」

「だから出るって言っているだろう」

俺の口調は少し強くなってしまった。とたんに早乙女は泣きそうな顔になる。

「ごめんね。相馬くん」

俺はこの早乙女が嫌いではない。それなりに有能で一生懸命な所もあるが、それ以上に早乙女の周りの空気が俺にとっては心地良かった。そうでなければ、まともに相手などしない。

俺は早乙女から目を放し、再び食べかけの弁当箱に意識を移した。早乙女もそれを話の終了と受け取ったのだろう、大きく一礼すると、すぐすごと離れていった。

弁当箱には隅の方に漬物が残っていた。漬物事情には詳しくないので、紫色のその漬物がもともと何の野菜かも分からず、積極的に食べたいとも思わなかった。しかし、毎日弁当を作ってくれているおばさんの手前残すわけにもいかず、まとめて箸でつかんで、一気に口の中に放り込んだ。甘いとも酸っぱいとも形容しがたい独特の風味が口の中に広がる。決してうまいものとは思えない。そもそも漬物などという食べ物は、昔、野菜の生産時期が固定しており、そして長く保存できないという事情によって保存食として作られたもので、一年中どこかしらで野菜が取れる現代には必要のない食べ物なのではないかと思う。

俺は目の前に人の気配を感じた。先程早乙女が立っていた位置に、今度は別の女子が立っていた。

「さっきのナオとのやり取りは、優しくないんじゃないか」

俺は視線を上げた。その女子は立ってはいしたが、一五〇センチを少し切るんじゃないかという小柄さゆえに、長身の俺が座っただけで、もほとんど同じ目線の高さだった。

「ナオって、早乙女のことか？ そんなことはないだろう。ちゃんと頼みを聞いてやったじゃないか」

すると相手は、大きな緑色の瞳に軽い怒気をはらんで、強い視線でこちらを見つめてきた。

「優しさが足りないと言っているんだ。あのナオがものを頼んでいるのだから、もう少し優しく接してもいいじゃないか。これだから人間の男は・・・」

相手は首を横に振った。それに合わせて、赤みを帯びた鮮やかな茜色の髪が左右に触れる。肩まで届くセミロングの髪はとても柔らかかに振れ、色の白い肌と絶妙なコントラストを保っていた。

相手の女子の名は、マール＝ファル。その名が示す通り、俺とは国籍が異なる。というか種族も異なる。マールはバルバリ族、通称山の民、の女だ。茜色の髪とネコ科の動物のような頭の上についている三角の耳が特徴的な種族だ。

俺の通う高校は、マルチ・スピーシーズ、他種族共存主義の理念の下、人類とは異なる種族、亜人を受け入れていた。それでも人類が過半数を占めているが、人類以外にバルバリ族、エルフィン族、デヴウ族といった亜人が通っていた。少数の種族を加えると全部で一〇種類以上にもなる。これだけの数の亜人が通う普通学校はこの国でも珍しく、まして人類と複数の亜人が同じクラスという学校は、おそらくこの学校しかないということだった。

「悪いが俺にはあれが普通の態度だ。要件に対しては的確に対応したつもりだ。批判される理由はないと思うが」

その言葉を聞いて、マールは呆れるような顔を浮かべた。

「その物言いがよくないのだ。理詰めで相手に緊張を強いる。もう少し柔らかい言い方はできないのか」

「あまり改まる必要性を感じていないのだが・・・、それより」
俺はマールが後ろ手に持っていた教科書に気がついた。

「早乙女の件とは別に、何か目的があつて俺の所に来たんじゃないか」

頭の上の猫のような耳がぴくつと動いた。

「よくわかったな。さすが話が早い。実は国語の授業でよく分からない所があつて教えにもらいにきたのだ」

マールはそう言うと、空いていた俺の前の席に座った。バルバリ族の女は総じて小柄で細身でその動作はすばしっこい。跳ねるように椅子に座る際に、制服の短いスカートが翻り、細い太ももが露わになった。俺は軽く視線をそらす。この学校には制服があるが、私服も認められている。クラスにはマール以外にバルバリ族の女が五人いるが、みな白を基調にした種族の衣装を着ているのに対して、マールだけは制服を着ていた。

「ほら、どこを見ている。ここだここ。この主人公の心情と云うか、そもそもこの小説の意味がわからん」

マールは教科書の一か所を指差し、首をひねっている。俺が了解したわけではないのに、マールはかつてに話を進める。早乙女とは正反対の性格だ。学校が始まって最初の定期テストで俺はマールよりも上の成績だった。それを知って以来、頻繁にマールは勉強のことを俺に聞いて来るようになった。もともとバルバリ族は伝統的に女尊男卑の文化で、男が女の言うことを聞くのは当たり前という風土のようだが。

仕方なく、マールが指差した教科書に視線を移す。それは今授業でやっている内容で、長編小説の一節を抜き出したものだった。

「ここ何が分からないんだ」

「もちろん言葉の意味は分かる。だが、主人公の心情を抜き出せと

言われても、書いてあること以外に思い浮かばない」

俺は教科書の一文を読み返した。

「ここは主人公の青年が、ヒロインに想いを寄せながらも、自分と相手の身分を意識し、それを告げられない状況と言うのが背景にある。だからこのセリフも相手を気遣いながらも遠ざけるそんな主人公の気持ちが表れているんだ」

マールは少し黙って、そのセリフとその前後の文脈を熱心に読んでいたが、すぐに顔を上げると、俺に向かって言った。

「なるほど。わからん」

「だから、どこが分からないんだ？」

「そもそも好きだったら好きと言えばいいじゃないか。この男は一体何をやっているんだ。どうせ後で確実に後悔するくらいなら、今、リスクを取って行動すればいいじゃないか。そもそもこんな情けない男の心情が教科書に載るといのがそもそも理解できない」

マールは少し怒っているようである。

「種族で考え方の違いというものもあるだろうが、そうした心情を理解するようにするのも、教育の目的の一つなんじゃないか」俺は諭すように言った。「バルバリではこういう男はいないのか」

「いないわけではないだろうが、少なくとも感心はされない。バルバリの男は常に勇気を試される。勇気がなくて行動できず、うじうじしている男の話が文学として語られるなんてことはありえないことだ」

なるほど。俺はそう思いながら、バルバリの男に少し同情した。

「まあ、それでもこの話の趣旨は分かった。それを踏まえて書けば正答になるのである。それならばそんなに難しい話ではない。手間を取らせてすまなかった」

そう言うとマールはまた素早く椅子から立ち上がると、自分の席に戻っていった。

俺は正直マールのことをすごいと思っていた。他種族の言葉は人類のものとは異なる。このため、人類社会に入り込もうとすると言葉の壁にぶつかる。しかし、マールは人類の言葉を難なく使いこなしている。下手な人類よりもはるか上というレベルだ。

俺のいるこのクラスは一年A組で、文系の選抜クラスになっている。このため、入試での学力が上位の者が選抜されているわけであり、皆成績もいい。マールもテストの成績ではかなり上の方に位置していた。マールは普段そんな様子は見せないが、もともと言葉のハンデがない人類に比べて、他種族でその成績を取るということは並大抵の才能と努力ではないのであろう。

その1（後書き）

学園ものにファンタジーを融合してみました。

あまり世界観を混乱させないようにしているつもりです。

ご意見などいただけると参考になりますので、よろしくお願ひします。

その2

マールとの話が終わると、ほとんど昼休みの終わりの時間だった。といってもどうせいつも席で寝るだけの時間なので、潰れてもどうでもいいのだが。

俺は教室を見回した。少し離れた席では早乙女がエルフィン族の男たちと話している。早乙女はまた何か頼んでいるようだが、エルフィン族はまじめに相手していないようだ。

エルフィン族は通称森の民。このクラスの二割を占める。全部で八人いるエルフィンのうち、七人までが男だった。もともとの学校にエルフィンの女は少なく、指折り数えるほどしかない。男女ともに押し並べて細身で小顔、人類ではありえないほど均整の取れた身体と顔のバランスであり、金髪で容姿端麗だった。

やがて早乙女は諦めたのか、深く頭を下げると、落ち込んだ様子で自分の席に戻っていった。そのすぐ後、エルフィン族の男たちは何やら話しながら笑っていた。

クラスのもう一つの種族であるデヴウ族はクラスの一割を占めていたが、教室には不在だった。いつものように全員連れだってどこかで話でもしているのだろうか。

マルチ・スピーシーズといってもほとんどの生徒は、種族同士で固まっただけで、必要があるときのみ他種族と接触するという程度であった。他種族と普通に話すという者はほとんどいない。例外は早乙女であり、マールであり、そして俺であった。もともと俺の場合は、人類と亜人という区分はなく、ただあるのは自分と他者という区分であり、人類も亜人も隔てなく他者であるという意味において、変わらずに接しているというだけであったが。

五時間目と六時間目の授業はいつもどおり退屈であった。なぜこの程度のことを教えるのに一時間も要するのか、端的に要旨を詰めれば五分で済む話ではないか。そもそも教科書に載っている内容なのだから、それを読んで理解すればいいし、更なる知識が必要なら参考書を読めばいいだけの話ではないか。なぜこんなに時間をかける必要がある、というのが俺が授業中に感じるいつもの思いだった。もともとそういうシステムだから仕方がないというだけの理解も当然にできてはいたが。

そして六時間目はいつものように終わった。そして・・・、

ホームルームが終わり、教科書などをかばんに詰め込んでいた俺は、誰かが近寄ってくることに気がつかなかった。すぐ近くに人影を感じ、顔を上げてみると、そこにはマールが立っていた。いつもとは少し様子が違っていて、珍しく緊張した面持ちだった。「何か用か」と俺が声をかける前にマールの声が響いた。

「私と付き合ってくれ！」

ホームルーム終了時のいつもの喧騒を打ち破るかのような大きな声だった。そして教室を沈黙が覆った。

突然のことで俺には何が起きたのかが分からなかった。

まず、今の言葉を発したのが目の前のマールであるのは間違いない。そして、その言葉が俺に向けられたのも間違いないだろう。マールの印象的な緑の瞳は確実に俺を捉えている。次の俺が考えたのは、言葉の意味だった。マールは他種族であり、まだ、人類の言葉の機微をうまく使いこなしていないので、これもきつと文字通りの

意味であろうと解釈しようとした。もつとも日ごろのマールの言語運用力を考えれば、可能性としてはかなり分が悪いとも思えるが・・。

「えっと、付き合っつて、どこへ？」

もちろん、分かっている。この返しがいかに間の抜けたものであるかを。だが、この場を無事切り抜けるには、これしか思いつかなかった。

マールが急に慌てだした。

「あっ、いや、そういう意味ではなくて、でも確かにそう解釈されるか、やっぱり。しかし、ちゃんと確認したのだが。えっと、私が言いたかったのはそうではなくて・・・」

マールは激しく当惑していた。

俺は自分の選択が間違ったことを悟った。そして、覚悟を決めた。「すまない。今の言い方は卑怯だった。マールが言いたいことが恋人関係になりたいということなら、それはできない」

マールはその言葉を聞くと、戸惑いの表情が浮かんだ。

「なぜだ。私は容姿には自信がある。男が重視するのはそこだろう。それとも私では不満か」

「いや、マールの容姿は間違いなく優れている。少なくとも平均を大きく上回っているのは確かだ。でも付き合うことはできない」

俺は取りつくるために嘘はつかない。これは本心だった。

「他に付き合っている女がいるのか」

「いや、いない」今まで告白されたことは何度かあるが、過去に付き合ったことも今付きあっていることもなかった。

「それでは、やはり私がバルバリ族だからか」マールは視線を落とし、つぶやくように言った。

「それは少しある。お互い価値観が全然異なる。それにも関わらず無理に付き合ってもうまくいくとは思えない。それにそれだけじゃない。そもそも俺たちはお互いのことをよく知らないじゃないか。それでいきなり付き合うなんて無理があるだろう」

それを聞いてマールの表情が明るくなった。

「それならお互いのことをよく知って、価値観を合わせられたら付き合ってくれるということか？」

どうしたらそう都合よく解釈できる？　と思いつつも、俺が言ったことを整理すると確かにそう取る余地もあるように思えた。だが、言葉に拘束されるつもりはなかった。

「未来のことについて約束するつもりはない。だけど、俺は自分の言ったことを覆すつもりはない。もっともそう簡単に種族間の価値観を変えることができないとは思えないが」

俺も人並みの感受性は持っている。この状況の中で女の子に恥をかかせるのは好ましいことではない。だから、話を種族間の価値観ということにすり替えた。ただ、それだけのことだった。

「分かった。その言葉だけで今は十分だ」マールの表情は上気していた。そして、マールは跳ねるように席から離れていき、早乙女の席に行った。

「ナオの言うとおりにした。完全な成功とはいえないが、まあ、出だしとしては上々だろう」話しかけられた早乙女は、笑顔を浮かべていたが、その笑顔が少し引きつっていた。

突然の告白劇はこれで終わりということ、帰り支度をしていた生徒たちの時間も動き出し、それぞれ自宅なり、部活なりに向かっていった。

俺もかばんをつかむとそのまま真っすぐに教室の出入り口に向かった。マールは早乙女と話を続けていた。その表情は明るい。その後ろから、このクラスにいる唯一のバルバリの男が俺のことを睨んでいた。

その3

2

校門を出る際には、クラスの連中が何人か俺に視線を向けてきた。しかし、俺がそっちを見ると、そいつらは慌てて視線を外した。

六月。太陽が無駄に発散するエネルギーが一番強く感じる季節。梅雨入りにはまだ少し早く、空には雲ひとつない。上着のブレザーを着ているため、汗がにじむ。

帰り道、俺はいつものように一人だった。もともと連れだって歩くのが好きではなかったし、他の生徒と話をして面白いと思うこともなかった。

家までは徒歩で二十分の距離。電車やバスを使う生徒も多い中、恵まれた環境にあるといえるだろう。

高校はもともと林であったところを切り開いた丘陵地帯にある。高校の東には南北に走る二車線の通りを挟んで公立の中学校があり、北と西には林が茂っている。南は崖もしくは傾斜の厳しい坂になっており、坂を大きなカーブを描いて通りが走っている。そこを八分ほど歩くと、電車の駅があり、駅を中心に繁華街が広がっている。大方の生徒は行き帰りにその道を通ることになる。

坂を下り、繁華街に至ると、東西に走る大通りが伸びている。通りにそって、スーパードヤ飲食店などが並んでおり、それなりに人も多い。ゲームセンターやカラオケ店など、高校生がよく立ち寄りそうな店も多くあるが、通常、高校の生徒は制服では立ち寄らない。通りには教員も多く出没するため、見つかると反省文、酒を飲んで

いるともなると即停学という重い処分が下るからだ。もっとも俺はそういう所に立ち寄る気はなく、関係のない話だが。

繁華街もそう長く続いているわけではない。大通りに沿って十分も歩くと、商店街は途切れ、住宅街に入る。ここら辺までくると、通りを歩く人の数も減ってくる。

おそらくそこら辺のタイミングを狙っていたのだろう。背後から複数の気配が、不自然な速さで俺に近づいて来る。

やれやれ……。大方予想していた事ではあったが。

「おい」俺の肩に手が載せられる。あまり好意的とは思えない力の強さだった。

振り返ってみると、そこには大柄の男たちが四人立っていた。いずれもバルバリ族の男たちである。皆、帽子をかぶり、特徴である茜色の髪は短くしているようで、帽子のわきから少し見えるだけである。猫のような耳は隠れていて見えない。バルバリの男と女の最大の違いはその体の大きさにある。女がマールのように小柄なのに、対して、男はみな大柄で筋肉質である。俺も百八十センチ近くあり、決して小さくはないのだが、俺の目の前にいるバルバリの男たちは皆それを超えている。

四人のバルバリのうち、一人は見覚えがあった。確か、クラスにいる男のようだ。名前は……。覚えていない。いずれにせよ、バルバリの男は見た目が似通っているので、あまり見分けがつかず、人違いですと言われるても納得せざるを得ない。

「ちょっとこっちに来い」有無を言わせぬ様子の男たちに無理やりに連行され、路地に連れて行かれた。表通りを二回曲がった所にあ

るその路地は、壁には挟まれており、この後起こるであろう展開にとっては申し分のない立地であった。

「お前分かっているんだろうな」男の一人がどすを聞かせた声で言い、俺を睨みつける。一際背が高く、おそらくこれがリーダーだろう。プロレスラー並みの体格と威圧感だ。

「分かっているって何が？」大方の予想はつくが、具体的に目的語を提示してもらわないと、何の事だか断定はできない。しかし、その答えは男たちにとっては、不遜とも思われたのだろう。その態度はさらに硬化したようだ。

リーダーと思われる男が、俺の胸倉をつかんで、壁に押し付けた。かなり強い力だ。逆らっても無駄だろう。

「この状況にも関わらずいい度胸だな。特進クラスのいい頭だから一度言えば分かるだろう。貴様ら人間がマールに手を出すな」

巨体から繰り出される脅し文句にはすごい迫力がある。普通の人間なら漏らしてしまうかもしれない。だが、俺はそんな繊細な感受性は持ち合わせていなかった。

「俺は手なんて出していない。マールの方が付き合いたいと言ってきて、俺は断った。なあ、あんたその場にいただろう。その通りだよな」

俺はリーダーの後ろにいる、推定クラスメイトの男に話しかけた。話しかけられたバルバリの男は、その凶体に似合わないような当惑した表情を浮かべた。

リーダーはそんなクラスメイトの様子を一瞥して舌打ちすると、

また、俺の方を向いた。

「うるせえ。そんなことはどうでもいいんだよ。金輪際マイルには近づくな」

要は嫉妬か、と思ったが、それを口にして状況を悪化させるほど馬鹿ではない。残りの三人のバルバリの男たちも強い眼光で俺を睨んでいる。こういう状況に置かれると、自分が何かとても悪いことをしたのではないかという感覚に陥る。周りから作用を受けやすい人の主体的意識というものがいかに脆弱な基盤の上に成り立っているものか。

「分かった。言うとおりにしよう。同じクラスだから全く近づかないというのは無理だと思うが、できるだけ努力はしよう。だけど、マイルが勝手に近づいてくるのは適用範囲外としてほしい。それでどうだ」

俺としては最も現実的かつ合理的な妥結案のつもりだった。しかし、目の前の男がみるみる顔を、おそらく怒りと思われる感情で赤くしていくのを見ると、その妥結案は否決されたい。だから異種間交流は難しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1482ba/>

クラスに異種族が普通にいたらどうなるかに関しての一考察

2012年1月6日07時48分発行